

本の流通にICタグ

来夏にも実験 出荷・在庫効率管理

電子データを生かして本の効率の良い流通を進めるため、無線を使って情報を読み取れるICタグを、本につける構想が出版界で進んでいる。来夏には国内の書店数店舗で実証実験が始まる見通しだ。書店の需要に合わせた本の供給や、万引き防止などにつながることを期待される。

開発するのは、講談社、集英社、小学館の出版3社と商社の丸紅などが3月、出版流通改革を目的に設立した新会社「Pubtex（パブテックス）」。ICタグは、極小のICと7センチ×1.5センチ程度の薄いアンテナ部分から成る。本やフ

イルムパックに直接貼り付ける形式や、在庫補充用の情報を記したしおり型の紙「スリップ」に貼り付けて本に挟み込む形式など、5種類を試作中だ。

出版界では、出版社が出版取次経由で書店に出荷した書籍の3割以上が返品され、年間2000億円の損失が生まれている。ICタグは、本1冊ごとに個別の



本に挟み込むタイプのICタグ

データを持たせられ、どの本が、どの書店にあるかなどをすぐ把握でき、きめ細かい在庫管理や出荷調整が可能になる。また、防犯ゲートと連動させ、万引き被害防止も期待される。

来年7月以降、3社の漫画や文庫を手始めに、順次、各商品にICタグをつけて出荷していく。既に数店舗の書店が実証実験への参加を希望している。人工知能（AI）による分析も組み合わせ、的確な配本数や重版のタイミングなどを割り出す。25年からの本格運用を目指している。